

瓢湖の鳥たち

「白鳥の湖」のような優雅で華麗な情景ではなかった。人間でいうと人口密度世界一ではないかと思われるほど過密状態で生息していた。その数の多さとけたたましい鳴き声。場所の奪い合い。それは生きるための格闘でもあった。私が新潟県阿賀市にある瓢湖（ひょうこ）を初めて見た時の印象である。

この辺りは昔から渡り鳥が渡来してくる場所ではあったが、猟銃の普及と共にいつの日か鳥の姿は消えて行ってしまった。ところが1950（昭和25）年1月突然シベリアより渡来し始めるようになった。

そこに「はくちょうおじさん」と親しまれる吉川重三郎さんによる餌付けに成功すると、毎年5千羽の白鳥がここで冬を越すようになった。野生の白鳥が人に馴れ、与えられた餌（もみ・パン・茶がら他）を喜んで食べている姿は世界中でも珍しいことであった。1954（昭和29）年には県と国から天然記念物指定になっている。

ここの白鳥は体長1.5m、体重10kg程度で羽を広げると2~3mにもなる大白鳥である。寿命は20~30年くらいといわれている。毎年10月上旬頃から2月下旬から春にかけてシベリアへ帰っていく。その後5~6月頃ヒナをかえし、秋にまた日本へと餌を求めてやってくる。

瓢湖には白鳥の他にマガモ、マガンなど様々なカモの種類からサギの種類まで2万羽ほどの渡り鳥がやってくる。しかし冬が去り春を向かえる頃には、瓢湖はめっきり寂しさが漂っている。今回私が訪ねた3月下旬ともなれば残っている鳥はごくわずかであった。しかしこの大自然の見事な輪廻は次への楽しみと変わっていく。また元気で帰ってきておくれ！

